

風になひき波にゆられてはるくくと

ゆくへも知らぬわが身なるらむ

月の夜

夏すぎ秋も

月も今宵の

なれし小杖を

上野の奥を

こゝよかしこの

聲もおしませ

月にうらみを

彼方の人に

思ひをいつか

うつして見せん

なかばなる

さひしさに

友として

とめ來れば

草に木に

なく虫の

もらすごと

われも猶

恐はずに

すべもがな

水

碓氷の紅葉

東くめ子

人の巧と 神の業

梢の色の薄からぬ

げに山姫の織かけし

思ふまもなく隧道の

岩さり開き山を裂く

湯氣の力に登り行く

俄に夜は明け渡り

木々の紅葉にうつろひて

いつれも深さみ山路の

うすひの嶺の紅葉見ん

紅葉の錦うつくしと

わやめも分ぬ闇にいる

力は神かあなわやし

車も人のたくみとは

朝日にあらぬ夕づく日

見る目はゆく照まさる

夢

敏子

ゆめと知りせはとこしへに

さめざらましを敷妙の

まくらの下は海なれと

君を見るめは生ひやらて

磯うつ波の音高く